

チューリヒ・トーンハレ (チューリヒ) / チューリヒ・トーンハレ管弦楽団

——華麗さと人を微笑ませる気品

文＝中東生

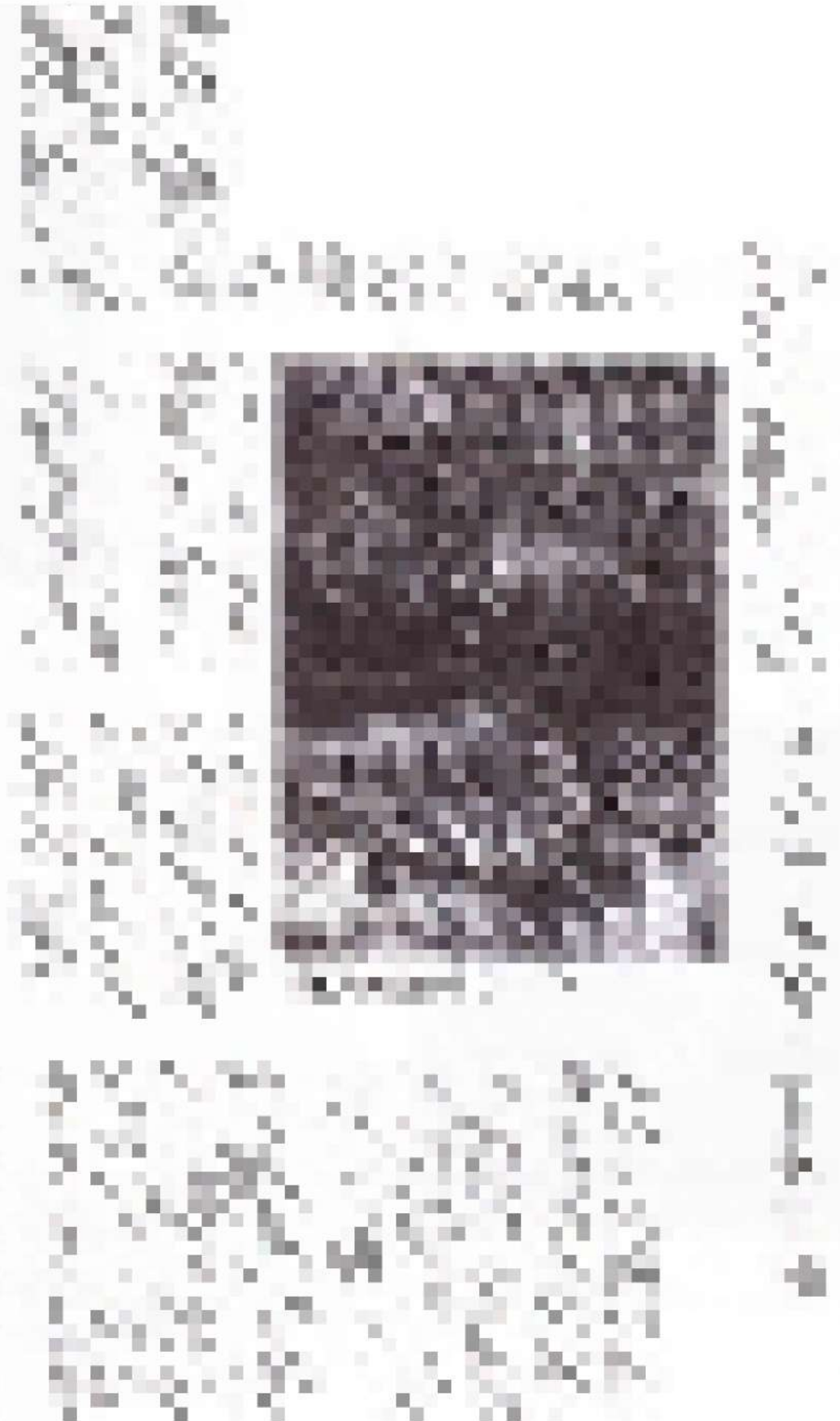
Text＝Shinobu Naka

市立劇場やオペラハウスを建設した
ウィーンの建築家フェルナーとヘルマー
により設計されたトーンハレは、
1895年10月にプラームス自身の指揮

で柿落としされた。管弦楽団の母体は
1862年に結成され、1985年に歌
劇場管弦楽団と分離し、現在は101名
から成る。

歴代首席指揮者にはヘーガー、ケンペ、
デュトワ、G・アルブレヒト、エッシェ
ンバッハ、若杉弘、フロールなどが名を
連ね、現音楽監督のジンマンは19年もの

任期を、今シーズンで終える。そのサウ
ンドはジンマン就任までは非常に澄んだ
響きを持ち、「このホールにして、この
オケの音色」と人々を納得させるもの





チューリヒ・トーンハレ大ホール © Tobias Madörin

だったと言われている。

元芸術監督のライモンド氏は「このホールは、建物全体が楽器のように共鳴します。何故そのようなことが可能かというと、大ホールの舞台後ろ端から客席、

そして通路、続く636席の小ホールまで、途切れる事なく同じ木で作られているからです」と説明する。その特徴を活かして、1500席の大ホールが売り切れると、通路まで解放して椅子を置き、

定員以上の聴衆を収容することができると。反対にこのシステムの難点は、大小両ホールが常に共鳴してしまつたため、同時には使えない点だという。

同管弦楽団には「ホールの響きが違つたので、日本では達成することができないヨーロッパの音を求めて」渡欧し、トーンハレでヴァイオリンを弾き続けている廣田真二郎のような日本人音楽家も多い。

在チューリヒの指揮者サンティによると、「トーンハレに限らず、良いオーケストラとは、指揮者の求めている音を実現させられるオーケである。トーンハレの音響は、練習時には響き過ぎるため、響かないような工夫をして稽古に臨むこともあるが、満席になつた時には最大の効果を発揮する」という。同管弦楽団の柔

軟性のある音は、音響を操りながら稽古を積んでいく過程で鍛えられたものなのかもしれない。

現在ホール改装案が議論されており、2015年の投票により決定されるというが、それでも、このシステムや座席は変えないつもりだという。最大の争点は内装で、1937年に隣接されたコンクレスハウスとの調和のため、ローズビークとオフホワイトにゴールドをあしらつたエレガントな装飾に、わざわざグレーのトーンを塗り足したという。その色を丁寧に落とした部分を実際に見せてもらつたが、何十年もの時を経て、再度姿を現したその華麗さは、人を微笑ませる気品がある。このような視覚的、聴覚的に優れたホールでこそ生まれた音色がトーンハレ管弦楽団の音と言えよう。

